

# 転回する南宋文学

—宋代文学は「近世」文学か?—

早稲田大学教育・総合科学学術院

内山 精也

## 一、緒言

宋代文学研究は、近年ようやく緒に就いたばかりの後発分野である。それは、——研究の前提ともいべき——『全宋詩』と『全宋文』が、それぞれ 1998 年と 2006 年に完成したばかりという事実に象徴される。この四半世紀、とくに 2000 年前後までの研究傾向を概括すれば、歐陽脩、梅堯臣、王安石、蘇軾、黄庭堅、陸游、楊万里等数名の大作家に局所集中したほか、時代的にも北宋に偏重し南宋は等閑視されてきた。また、中国語圏では詩よりも詞への関心が高らかに高く、詞→詩→文という順で関心の度合いが低下する顕著な偏向も存在した。このように、かつては、宋代文学研究各領域のなかに様々なレベルの偏差が存在し、未開拓の分野もけっして少なくなかった<sup>1</sup>。しかし、『全宋詩』と『全宋文』の公刊が大きな契機となり、この数年間に、手薄な研究対象にも少しずつ光が当てられるようになり、時代的アンバランスや文体的偏向も急速に解消されつつあるように感じられる。

かくいう発表者も、これまで蘇軾を中心として、北宋士大夫の詩歌を専攻してきた<sup>2</sup>が、近年は南宋文学にシフトし、主として南宋末期の布衣詩人群「江湖詩派」を研究対象としている<sup>3</sup>。この詩人グループは、これまで学界において余り注目されてこなかった。我が国では、つとに吉川幸次郎が『宋詩概説』(岩波書店、1962 年)や『元明詩概説』(同、1963 年)で、彼らの存在意義を説いてはいるものの、その後、何一つめばしい成果が生まれていない。中国では、張宏生の『江湖詩派研究』が公刊された(中華書局、1995 年)のを嚆矢として、それに続く業績も一、二生まれてはいるが、今なお学界の注目を集めるといえるレベルには至っていない。その最大の要因は、彼らを宋代詩史という枠組みの中に押し込め、静態的にとらえようとするスタンスが一般的であったことにあるように思われる。張氏によれば、このグループは 138 名から成り、その 9 割近くが下級士大夫と布衣である。今日に伝わる作品数も、強半が一、二巻程度であり、彼ら個々人の功績はむろん蘇軾や陸游等の大作家とは比べるべくもない。さらに、彼らが宋朝滅亡前夜に活躍したという事実を重ね合わせると、自ずと彼らには「詩史の衰退」というレッテルが貼られることになる。このような事情が作用してか、マイナー詩人群である彼らは、今日までホットな研究対象とはなり得なかったのであろう。

しかし、彼ら江湖の詩人たちの詩作活動は、宋朝の滅亡とともに雲散霧消したわけではない。元から明へ、明から清へと、時代が下るにつれ、彼らに類する江湖詩人の活躍の場は確実に拡がり、より活発になっていった。つまり、宋末の江湖詩派は決して孤立した一過性の文学現象ではないのである。よって、彼らを宋元から明清へと連なる近世文学史のなかで位置づけ直し、動態的にとらえ直すと、その存在感は俄然高まることになる。

発表者は彼らの詩作を「詩の近世化」という観点から照射し、彼らを再評価することによって、中国文学史におけるパラダイム転換を企図している。江湖詩派、ひいては宋代文学を改めて定位するために、その前提となる諸問題に一つの道筋をつけることが本発表の目的である。

## 二、中国近世文学史の問題点

発表者は「近世」という言葉をすでに二回用いているが、まずは、文学の「近世」とは何か、という原理的問題を問い直すことから始めるべきであろう。

ネーション・ステート (Nation-state) の先進国、ヨーロッパでは、文学史に対する根本的な懐疑から、20 世紀半ばには文学史研究も零落の一途を辿った、という (H.R.ヤウス『挑発としての文学史』、轡田収訳、岩波書店、2001 年)。同様に史学の領域でも、今日、時代区分論は流行らなると仄聞する。しかし、少なくとも中国にあつて、文学史研究は今なお熱気を帯びている。過去の文学史を総括し、新たな文学史の創出を企図して、『中国文学史学史』なる論著も刊行されたほどである (計 3 冊、董乃斌・陳伯海・劉揚忠編、河北人民出版社、2003 年)。

ネーション・ステート後発国の当然の理として、日本を始め東アジア各国は、自国の文学史を作成するに当たり、まずはヨーロッパにおける関連著作に範を取り、そこに展開された幾つかのモデルを運用することによって、近代的文学史を構成していった。とりわけ中国において、初期の文学史が量産され始めた民国初期 (1920 ~ 30 年代) は国難の時期に当たり、いち早い言語の近代化 (国語の普及) が急務であったがゆえに、それら既成のモデルに適合させんとするあまり、かなり強引な誘導的操作が加えられている。

つまり、「国民の文学=口語的文体による小説」というゴールを予め指定し、そこへと無理なく連なる予定調和的なストーリーが描かれた。その結果、今日なお通行する、「……唐詩、宋詞、元曲、明清小説」という、ジャンルの新陳代謝を中心とする文学史モデルがこの時に確立され、宋以降、主流の文体が文言から白話へと変化し、通俗化してゆくというストーリーがあたかも自明の既定概念のごとくに描かれ始めたのである。

発表者は、元明以降、白話の各種文体が隆盛を迎えたことを否定するつもりは毛頭ない。もとよりそれは否定しようもない事実であろう。かつまた、そのような文学史モデルの底流にある進化史観についても、これを根底から疑問視する立場ではない。ただし、このような操作が、それぞれの時代の実相を覆い隠す危険性のあることを問題視する。宋~清 9 世紀半の文学現象を冷静な目で概観すれば、文言と白話の二大文体が、相互に影響を受けつつ、多様な文学現象を生んだ現実を容易に垣間見ることができる。むしろ、白話が文言にとって替わったわけではなく、文言作品もそれまで以上に量産されつづけた、とあってよい。したがって、元以後の文学史を、文言か白話かというように択一的に描くことは実態にそぐわない。むしろ、この二つの文体の棲み分けや融合、混合にこそ、この時代の実相がより多く内包されている、と発表者は考える。

## 三、宋代文学は近世文学か？

内藤湖南、宮崎市定の説に拠れば、中国の近世は宋代に始まる。発表者には、「近世」の普遍的指標があるのか否か不明であるが、少なくとも、次のようにいうことはできよう。——もはや「中世」ではなく、さりとてまだ「近代」ではない時代、それが「近世」である、と。そして、ゴールとしての「近代」が、ネーション・ステートという共通の国家体制によって支えられた時代である、という前提に立てば、その一歩手前の「近世」は、当然のことながら、その性格を一定程度潜在させ、そこへと一歩近づいた時代ということになるだろう。したがって、言語文化についていうならば、「近世」のキイ・ワードは自ずと「世俗化」「通俗化」「大衆化」ということになってゆくであろう。そして、この点は現在通行する「唐詩、宋詞、元曲、明清小

説」モデルに見事に当てはまる。しかし、前述のとおり、このモデルは文学史の複雑な諸々相を単純化しすぎている嫌いがあるのみならず、新興のジャンルを強調するあまり、伝統的文体である文言の社会的機能を過小評価しすぎている。

内藤湖南は、宋代文学の近世的側面を唱えた際、詞のみを例に挙げている（「概括的唐宋時代観」1922年）。しかし、「詞」の文体はそもそも白話ではなく、文言を主とする。しかも、宋代の平均的作者にとって、「詞」は「詩」に次ぐ第二の文藝であった。加えて、宋代の作と確定できる白話小説はまことに寥寥たる数である。したがって、かりに内藤・宮崎説が総体として妥当であったとしても、こと文学の領域に関していえば、宋代文学＝近世文学という括り方には、大いに疑問符がつくのである。どうひいき目に見ても、宋代文学は白話＝通俗的文体より、文言＝伝統的文体の方が、圧倒的に優勢な時代であった。それでは、宋代文学を近世文学と言い切ることができるのであろうか。

両宋 300 年間における文学の「通俗化」は、時代が下るにつれ、顕在化してくるが、総じて北宋はなお水面下における動きにとどまり、南宋も後半期に至ってようやくわれわれの目に留まる現象が現れ始める。よって、結論的にいえば、宋代文学は中世から近世への移行期ととらえるのが、もっとも穏当であろう。そもそも、言語は伝統文化のもっとも中核的な位置を占め、自ずと高い保守性を帯びる。かりに内藤・宮崎説が妥当であるとしても、それは社会の変革と歩みを完全に一つにするわけではない。たいていは何世紀かのタイム・ラグが生まれ、遅れてやって来る。

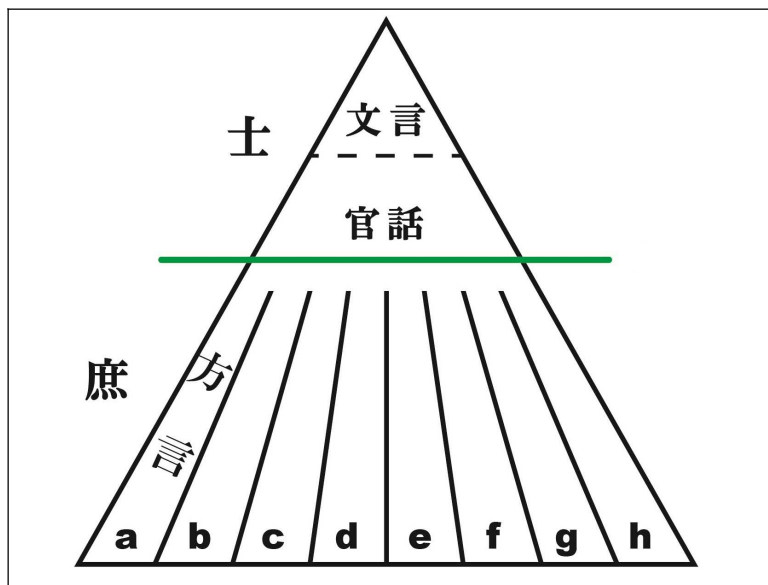
前述のように、宋代文学の主要文体は文言である。文言は先秦以来の伝統をもち、伝統との連続を保證する文体として機能しつづけてきた。したがって、「通俗」の対極に位置する伝統文化とも性格づけられるが、文言に通俗化が存在しないかといえば、発表者はそうは思わない。ただし、それは言語現象としての通俗化ではなく、より隠微な形をとって現れ、それを掬い出さない限り明確化されない。一言でいうならば、文言の通俗化とは作り手の通俗化、すなわち使用人口の増大という形で現象する。そして、両宋 300 年間に文言の作者人口は、確実に何倍にも増加した。細かなデータはむろん存在しないが、一つの制度に着目することによって、それを証明できる。

#### 四、言語の社会階層

それを説明する前に、われわれは今一度「言語の社会階層」という問題に立ち返らなければならない。なぜなら、近代という横並びの均質的空間に身を置いていると、ともすると見失いがちな視点だからである。しかし、われわれが分析を加えようとする時代は階級社会であり、使用言語と社会階層は平行な関係にあった。「古典」という語は漢語で表現されるとその本質が背景化するが、「Classic」という英語／ラテン語は、かつてそれが上層階級に属していた歴史を端的に示しており、この点は欧州のみならず、東アジアでも同様であった。上層階級に属し、高貴な階層を表象する教養、それが古典であり、元来、庶民とは縁の浅いものであったことを、われわれはまず再確認すべきであろう。そして、中国における「古典」は、文言によって記述されつづけてきた。

ベネディクト・アンダーソン (Benedict Anderson) が提示したモデル<sup>4</sup>を参考に、中国伝統社会における言語と社会階層の関係を図示すると次頁のようになる。

中国の伝統的階層は、単純化すれば「士」と「庶」に大きく二分される。『礼記』(曲礼)にいう「礼は庶人に下らず、刑は大夫に上らず」という条文は、「士」(厳密に言えば、「大夫」は「士」



の上位階級になるが、本発表が対象とする科学社会では両者を併せたものが「士」であるので、ここでは拡大解釈すると「庶」の別をよく象徴している。そして、「士」の人口はいつの時代も全人口の一割に満たないものであった（現代中国でも、共産党員は全人口の7%未満の数である）。したがって、「古典」は、少数の「士」が大多数の「庶」の上に君臨するための文化的な必要十分条件と見なされていたはずである。より具体的に言うならば、必要条件としての「文

言」の運用能力と十分条件としての「礼」の実践能力こそが、その内実となる。

近世に至るまで、「庶」は原則として文字を識らず、それぞれの出身地の方言のみを用いたと見なされる。それに対し、「士」は出身地の方言のほかに、官人の共通語「官話」を用い、さらに伝統的書記言語「文言」を駆使した。つまり、単一の口語俗語のみを使用した「庶」と、——それ以外により普遍性の高い言語を二種類操ることのできた——多重言語使用者としての「士」、という明確な対比が、近世以前には存在した。

## 五、文言の通俗化と科挙、印刷出版業の隆盛

ところが、近世に入ると、この言語使用における「士」と「庶」の別が、徐々に薄らいでゆく。その変化を促したものは、科挙制度と印刷出版事業の発展である。両者はともに唐代から存在したが、規模といい、社会的な影響力といい、より本格的な開始は北宋以降のこととあってよいであろう。印刷が識字人口の拡大に寄与したというのは、分かりやすい理屈であろう。一方、科挙についてはいささかの説明を要するかもしれない。

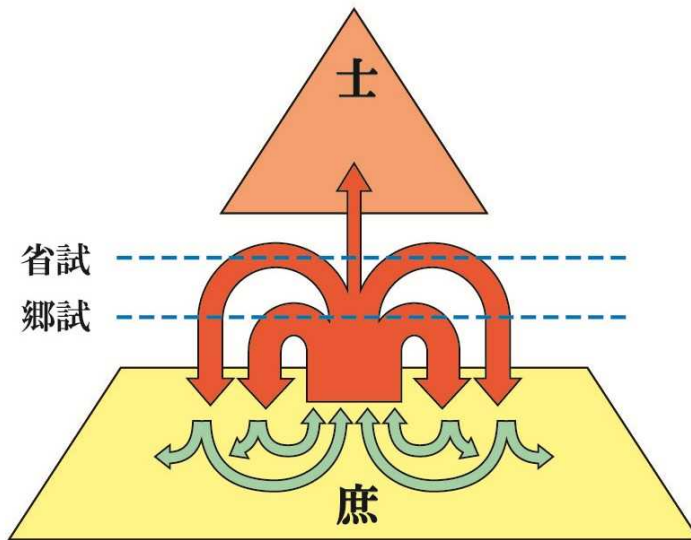
とはいえ、そのメカニズムに着目すれば、それはそう複雑な問題ではない。つまり、科挙という制度は、ごく少数の及第者と圧倒的多数の落第者を定期的に生み出すシステムにほかならないからである。具体的なデータを挙げよう。北宋末期、宣和6年(1124)の礼部省試では、約15,000人の郷試及第者が都に集められたが、最終的に「進士及第」の栄誉を勝ち得たのは、805名であった。実に9割5分に相当する一万四千人余が篩にかけられている。郷試に応じた人数については、残念ながらデータが残っていないが、おそらく合格者の十倍は下らなかったであろう。したがって、このデータに基づけば、三歳一挙の科挙によって、10万規模の落第者が量産され、<sup>5)</sup>「士」になれなかった彼らは必然的に民間に沈澱することになった。

落第したとはいえ、長年の受験準備によって、彼らはすでに高度な文言の運用能力を備えていたと考えられる。そうすると、科挙の持続的実施によって、「士」の必要条件を満たす人材が三年ごとに10万規模で「庶」のなかに増加してゆくことを意味する。地方の州県学や書院、私塾に通う学生のなかに占める非士族＝「庶」の比率も、決して低くはなかったはずである。もしそうならば、応挙のために設置された各種教育機関では、「庶」を教学の対象として、「士」の「古典」を教授するということが当たり前に行われていたことになろう。

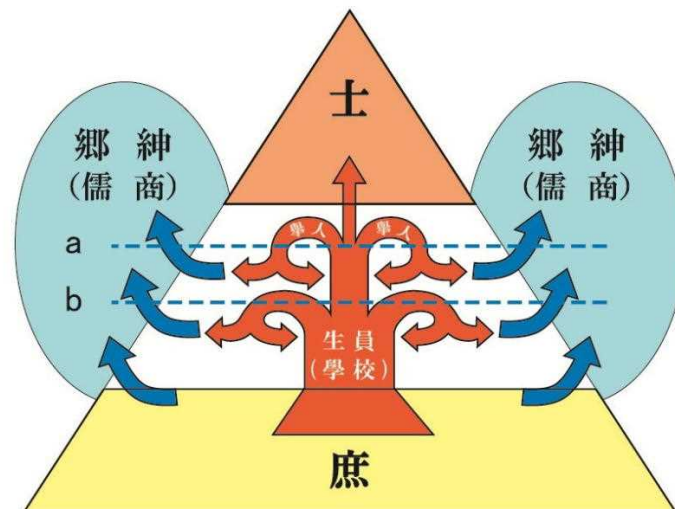
以上のように、科挙とそれに連なる各種教育機関は、かつては「士」の文化的表象として存在した「古典」的素養を「庶」に移植する装置としても機能していた、とってよい。

【参考】科挙の宋元型と明清型

【圖 2】



【圖 3】



(a = 会試 b = 鄉試)

そして、もう一つの促進要因、印刷出版は、もともと中央政府の文教政策と深く関わり合い、官主導で発展したが、11世紀の後半期になると民間の出版業も急速に力をつけ、社会的影響力をもち始める。その一つの象徴が、東坡烏台詩案である。元豊二年(1079)に勃発したこの筆禍事件では、民間の書肆によって印刷刊行された詩集が証拠物件として上呈されている。この事例は、民間の書肆がすでに同時代文学をもその事業範囲に納めたこと、そしてそれが政治闘争の具とされるまでの社会的影響力を持ったことを示唆している。この事件の三年前、いみじくも蘇軾自身が当時の民間出版業の興隆に言及している。彼は「李氏山房藏書記」(中華書局、『蘇軾文集』巻15)のなかで、その数十年前、書物を入手することがどれだけ困難であったかを述べた後に、「近歳市人<sup>うた</sup> 転た相ひ模刻し、諸子百家の書、日に万紙を伝ふ。学者の書に於けるや、致し易きこと此くの如くして、其の文詞學術 当に昔人に倍<sup>ばいし</sup>蕪すべし」と、書籍の入手が昔と比べ何倍も容易になったことを記している。

現存の北宋刊本は僅かなため、当時の実態も今となつては大変見えにくいだが、南宋は現存刊本の数も多く、それによっておおよその状況を知ることができる。南宋の出版史を特徴づけているのは、何といても坊刻本の数と種類の多さである。文学関連に限っていえば、北宋は主として唐代までの典籍が主たる印刷対象であったのに対し、南宋に入ると同じ宋代の詩人別集が刊行され始めるほか、その注本、分類集注本、選本まで編纂刊行され、さらには詩文創作のための啓蒙的選本や用語集・類書まで刊行されるに至っている。それらのほぼ全てが坊刻本である。むろん、挙子向けの参考書の類も夥しい種類に上り、現存するものも多い。このような民間出版業の活況が、文言の通俗化＝使用人口の増大に寄与したことは想像に難くない。

## 六、白話文体の社会的地位向上

現存資料による限り、宋代文学はなお文言によって支配された世界である。しかし、これまで述べてきたように、文言の通俗化が水面下で進行していたように、白話文体の社会的比重も徐々に高まりつつあった。ちなみに、書記言語としての白話は、官話が主体となる<sup>6</sup>。

白話の発展段階を考える場合、理念的に三つの段階を想定できる。第一に白話がもっぱら口頭でのみ用いられた段階、第二に書記言語としても用いられるようになった段階、そして第三に出版言語としても用いられるようになった段階である。資料的な制約から、今日では、第一、第二の段階の開始時点を正確に特定することは不可能である。

第二段階、すなわち白話文体の成立は、敦煌文書の存在によって、どんなに遅くとも唐代の後半期には実現していた。むろん北宋の公文書類のなかにも、白話文を含む文献が散見される。その多くが会話文の引用であるが、前述の『東坡烏台詩案』も官話の痕跡を色濃く残す文献である。文飾を必要としない事務的な行政文書の多くが、当時すでに官話の書記文体によって記述されていた可能性を示唆する。

第三段階の開始は、北宋前期、11世紀の前半にまで遡る。禅宗語録が最初期の刊行対象となった。不立文字を標榜する宗派であるがゆえに、祖師の肉声を記録した白話文は、文言によって潤色してはならない聖なる言葉であった。文化的に保守的な士大夫集団が、雅俗の見を捨てて、主体的に白話文にアプローチした理由は、宗教という特殊な背景によるものと推察される。北宋の時代、禅宗が士大夫の必須の教養となったことにより、彼らの言語認識における白話文の地位も格上げされたと見なされる。

そして、白話文体の社会的地位を一気に高めたのは、南宋中期の朱熹とその門下生たちが編纂刊行した儒家語録であろう。なぜなら廃仏を唱える士がいたとしても、廃儒を唱える士はい

ないからである。朱熹はおそらく禅宗語録にも影響を受けながら、主体的に北宋二程子ならびに謝良佐の語録を整理編纂し、近親者に命じて刊行させている。周知のとおり、彼自身が発した言葉も、門下生の手で、最終的に『朱子語類大全』として整理され刊行されるに至っている。官話文体の語録を教学プロセスに積極的に取り入れた朱子学が元の時代に官学の地位に昇るに及んで、白話の書記文体も完全にオーソライズされるに至ったと考えられる。したがって、白話が出版語として公認されるに至る転換点は宋末元初にあると見なされる。白話文学の最初期の刊本もこの頃を境として登場し始めており、白話の社会的地位の向上と不即不離の関係にあると考えられる。

## 七、宋詩の確立と通俗化

北宋の中期、慶暦年間は宋代政治史の大きな転換点といってよいが、文学も同時期に変革期を迎え、詩風・文風が大きく変化した。その中心的役割を果たしたのは、主として南方出身の進士及第官僚であった。そして、後世「宋詩」の典型と見なされた風格が、歐陽脩から蘇軾・黄庭堅に至る二世代の間に確立され、同時に宋代士大夫の詩歌観も完成した、といってよい。

**宋代士大夫の理念モデル**

S = 宋代士大夫の理想モデル(正三角形)

北宋の中後期に活躍した代表的詩人はほぼすべて進士及第の高級官僚であった。そのため、彼らの価値認識の基盤には、彼らの意識の有無濃淡にかかわらず、進士科の試験科目が大きく作用したと見なされる。

宋代の進士科試験は、王安石の科挙改革以前においては、①「論策」(主として時局に関わる論文課題)、②「帖経／墨義」(儒学の知識や理解を問う課題)と③「詩賦」(文学創作の課題)の三場からなつた。

司馬光が「国家用人の法、進士及第者に非ざれば、美官を得ず」(「貢院



乞逐路取人状』、『温国文正司馬公文集』卷30）と述べたように、北宋も半ばを過ぎると、要路の官すべてを進士及第者が独占するようになった。そのため、「士」を目指す者たちは皆、進士甲科及第を目標に、試験準備とその対策に勤しんだはずである。その結果、北宋中期以降の士大夫たちの知的基盤も高度に平準化され、前頁に掲げた図表のような文化的構造をもっていたと思われる。すなわち、官僚であると同時に、学者であり、詩人でもあるという三位一体型の構造である。この三者のバランスの上に宋代士大夫は立っており、いずれの一つが欠けても理想的な士大夫とは見なされなかったであろう。もちろん三者の中にも優先順位はあり、官としての立場が最優先され、詩人としての才が末尾におかれたであろうことも容易に想像される。しかし、この三者は一個の士大夫のなかでもつねに分ちがたく同居していた、と考えられる。

したがって、彼らが詩を創作する際にも、この複合型の構造に相応しい内実が求められるようになった、といつてよい。すなわち、純粹に文学的見地のみから詩作に耽るのではなく、官としての視点、学者としての知見をも併せもつスタイルが模索された。いかにレトリックの上で優れた詩を書いたとしても、それが国家の経営に責を負う者としての風格に乏しいものであったならば、躊躇なく批判の対象とされた（たとえば、寇準の詩）。また、学識や理知のかけらも感じさせない感情過多の詩風も忌避されたと推測される。宋詩に社会批判の詩が多かったり、説理に傾く詩が多かったり、典故を多用して銜学的傾向をもつ詩が多かったりする理由も、このような士大夫の詩歌観と深い関わりがある。

士大夫によって確立された宋詩の特徴は、近世の象徴ともいふべき「通俗化」とは、相反する性格を濃厚に帯びている。詩経以来の儒学的詩歌観を改めて中心にすえて凝縮し、士大夫の文化的価値認識に照らして再構築した、伝統回帰の性格を強く内包する詩歌観と見なすことができる。そして、この詩歌観は、宋代に止まらず、明清に至るまで、士大夫を中心として詩の伝統的理念として生きつづけた、といつてもよい。

しかし、ここで前述の理屈を想起してもらいたい。文言の通俗化は、作り手の通俗化、すなわち作者人口の拡大という形で現象するという理屈である。宋代には非士大夫の詩人が多数誕生した。北宋末・南宋初の人、呉可の『蔵海詩話』は、北宋後期・元祐年間（1086 - 94）の南京で、商人が榮天和なる士大夫の私塾に通って詩の作法を学び詩集を多数編んでいた事実を伝えている。また、同時期の首都開封で屠殺業者の作った詩が大流行したことも記している。そのほか、南北両宋の交代期に、李清照や朱淑真のような閨閣詩人も誕生した。彼らこそは士族出身の一般的な婦女が詩人の仲間入りをした魁的存在である。唐までの女流詩人は絶対数が少ないだけでなく、ほとんどが宮女や妓女、女冠等の、家庭を離れた特殊な職種の女性たちであった。それに対し、朱・李二氏は、通常の士大夫の家庭で生まれ育った女性であるという点が新しい。

とはいうものの、北宋～南宋中期の、民間詩人や閨閣詩人の活躍を伝える記載はさほど多くはない。作詩人口の増大を確実に感じさせる事例は、やはり南宋の後期まで待たなければならない。

そして、その予感を確信に変えるのが、江湖詩人たちの活躍である。

彼らが体現する通俗性とは、第一に彼らの社会的身分である。冒頭に記したとおり、138名中の約9割が下級の士大夫と布衣であった。このような社会的身分の詩人が百名を超えて一時期に誕生し流行した事実が、作詩人口の増大を間接的に証明していよう。第二に彼らの詩がそれを体現している。彼らが作った詩は「晩唐体」と呼ばれ、形式的には五言律詩や七言絶句を中心とする短篇の近体詩が多用され、内容的には日常卑近な題材が好まれる一方、社会諷刺や政治批判の詩はほとんど書かれない。また典故を多用して学識を競う詩もほとんど作られな



った。つまり、彼らの詩作傾向は、宋代士大夫の詩歌観から大きく逸脱している。北宋士大夫によって高踏的かつ倫理的な表現手段として強化された詩が、彼ら江湖詩人の手のなかでは、ほぼもっぱら等身大の自己を表現する抒情の具として生まれ変わっている（この点は、民間に詩作が拡がっていく際の重要な条件となる）。第三に、彼ら無名の詩人たちが世に知られるきっかけを作ったのが、都・杭州で書店を営む陳起という民間人であった、という点である。民間の書肆が、無名詩人の詩集を陸続と編集刊行し、詩のトレンドを作り出したという、新しい詩の流行の形に、新時代の到来を感じさせられる。第四に、印刷出版という営利事業が流行のすべての起点となっている点である。以上の四点は、すべて「通俗化」のベクトルを示している。

以上、考察してきた内容を総合すると、文言の通俗化、白話の社会的公認（出版言語化）、民間出版業の隆盛（民間出版資本の成熟）、という近世的な諸現象は、すべて 13 世紀以降の南宋後期に集中して現れ出ている、ということである。よって、両宋 300 年の文学史は、その一点を目指して、じわじわと、しかし着実に、水面下で通俗化の歩みを進めた時代であったと、特徴づけられる。換言するならば、宋代は文学的近世の黎明期であった。

---

\*1 1980 年以降の日本における宋代文学研究の概要については以下の拙稿を参照のこと。

・内山精也「文学研究—詞学および詩文を中心として—」（遠藤隆俊・平田茂樹・浅見洋二編『日本宋史研究の現状と課題—1980 年代以降を中心として—』pp.237-280、汲古書院、2010 年）

\*2 近年、拙著『蘇軾詩研究—宋代士大夫詩人の構造—』（研文出版、2010 年）にまとめた。

\*3 日本学術振興会科学研究費の助成による、計 8 名からなる共同研究プロジェクトを進めている（基盤(B)「南宋江湖詩派の総合的研究」）。また、『江湖派研究』という学術誌を創刊し、昨年、第 2 輯を刊行した。

\*4 ベネディクト・アンダーソン『（増補）想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』（白石さや、白石隆訳、NTT 出版、1997 年）Ⅲ 国民意識の起源。アンダーソンは、ヨーロッパで国民国家が形成されてゆく過程を考察し、そのなかで国語の成立過程についても記述している。彼は、中世において半固定的であった言語と社会階層の関係性を、出版資本が切り崩してゆき、それが国語創成の下地となったことを指摘している。その前提として、「神聖なる文章語」（ラテン語）と「口語俗語」（各地の方言）という二種類の言語を使いこなせる人々が知識階層、すなわち特権階級を構成し、後者一種しか用いない階層が大衆であった、という概括を行い、二重の言語使用者である上層階級と文字をもたない口語俗語のみの単一言語使用者である大衆という対比を鮮明に描き出している。

\*5 荒木敏一『宋代科挙制度研究』（同朋舎、東洋史研究叢刊 22、1969 年）附篇「宋代科挙登第者数及び状元名表」によれば、科挙合格者の数（進士、諸科、特奏名を併せた数）は北宋では仁宗朝以後、ほぼ 1000 名規模となり、南宋でも同様である。及第者の数は時期によって大きく増減するが、受験者総数の傾向は一度増加したならば、そのレベルを維持すると想定される。宣和 6 年の礼部省試における及第者数は北宋の平均値よりかなり多いが、受験者総数は当時の傾向と著しく異なるとは考えにくい。よって、少なくとも 10 万規模の受験者が存在したと想定することは、実態からそう大きくは乖離していないと考える。

\*6 古屋昭弘氏が白話文体について示唆に富む指摘をしている。白話文学が安定的に量産され始めた明末清初を対象とするものではあるが、それが強い平準化、規範化の傾向をもち、方言の影響は存外少ないと指摘している（古屋昭弘「書籍の流通と地域言語—明末清初を例として—」、雄山閣、アジア地域文化学叢書 2『アジア地域文化学の発展』所収、2006 年）。おそらく、これは民間の出版資本が言語文化に関与し始めたことと深い関係があるように思う。つまり、書記文体の地域差が大きすぎると、販路の拡大を阻害することに繋

がるからである。そのため、民間の出版資本は、より普遍性の高い書記文体を必要とした。そのため、言語的社会的階層の上位にあり、白話の中で出版言語として最初にオーソライズされた官話文体が、白話文体の規範とされたのではないかと推察される。それが結果的に白話文体の平準化もしくは規範化という現象を生んだのではなかろうか。